

室町期歌会資料集成稿―釈文と略解題―(六)

石澤一志・酒井茂幸・武井和人・日高愛子・山本啓介

【緒言】

本連載は、多くが未刊・未整理のまま残されてゐる室町期歌会資料（及びそれに関連するもの）を、広く学界に紹介することを意図としてゐる。

小論では、神宮文庫蔵『嘉吉文安御會倭調』（三・六三四）に収められる以下の一一の歌会（歌会の名称はわたくしに付した部分をも含む）の釈文を掲げ、併せて略解題を付した。

- | | |
|---------|------------|
| ①内裏月次御調 | 嘉吉三年三月盡 |
| ②内裏月次御調 | 同年四月廿一日 |
| ③内裏月次御調 | 同年五月廿五日 |
| ④内裏月次御調 | 同年六月十九日 |
| ⑤内裏月次御調 | 同年八月十五日 |
| ⑥内裏月次御調 | 同稔八月廿七日 |
| ⑦内裏月次御調 | 文安元年八月十五夜 |
| ⑧内裏月次御調 | 同年十月廿一日 |
| ⑨内裏月次御調 | 同年十月廿一日 |
| ⑩内裏月次御調 | 同年十一月廿一日 |
| ⑪内裏月次御調 | 同年十一月廿四日当座 |

当該歌会資料の釈文、略解題の礎稿作成者を、各々の末尾に（ ）に入れて示した。ただし内容に関しては、著者相互に検討してゐる。

釈文作成にあたり、以下の方針に従った。

- (1) 漢字は原則として通行の字体に統一した。
- (2) 丁移りを、「一・一」の如く示した。
- (3) 上句と下句の間に、一字分空白を設けた。

(4) 底本には、朱細筆で傍記が多数存する。また数は少ないものの、墨細筆での傍記も存する。後者のものに限り、〈墨〉を傍記に注した。

小論の一部は、JSPS科研費一七K〇二四〇七の助成を受けたものである。

底本の利用を許可された神宮文庫に、あつくお礼申し上げます。

なほ、共著者の一人である酒井茂幸氏は、本年七月、急逝した。小論作成に直接的な関与はしてゐないが、底本選択時、氏より重要な示唆を受けたことに鑑み、共著者として加へることとした。どうか、諒とせられたい。

（武井和人）

1 内裏月次御詠 嘉吉三年三月盡

〔神宮文庫蔵『嘉吉文安御會倭詠』（三・六三四）〕

内裏月次御詠 嘉吉三年三月盡（端作題）

早春雪 若千代丸

春きてもはれぬ雪けの雲間より 出る光さむしも

子日松

いくはるそけふをためしにひくまのゝ 松も二葉の千世の行末

湖上霞

鳴てるやかすみわたれる波間より たえ／＼みゆるせたの長はし

霞隔遠樹

花ならはそれとミてまし朝ほらけ 霞にこもるおちの梢を

竹裏鶯

一むらのまかきの竹のよをかけて おのかねくらと鶯のなく

名所若菜

消そむる雪間しられて春日野に けふ里人もわかな摘也

故郷梅

袖ふれし軒端のむめのにははすは なにゝ昔の春をのこさん

梅薫袖

いとはしよ軒端の梅の下風も ふかき匂ひを袖にうつさは

依梅待人

まつ人をさそひてきなけうくひすの やとれる梅の花ちらぬ間に

行路柳

道のへや往來の袖の上風に のとかになひく青柳の糸

岡早蕨 若千代丸

花見にとゆきゝの岡のもろ人も まつやすらひて折わらひかな

深夜春月

梅かゝも身にしむ風の更る夜に なかめすつへき月の影かは

野春雨

をしなへて今や木のめは春雨に ふる野の草もみとりそふ頃

牧春駒

真薦おふ美豆の御牧の春霞 立もはなれすあさる駒哉

夕雲雀

春の野のかすみのあさに声もれて 草葉におつる夕ひはり哉

帰雁連雲

なにをさて秋来し嶺にしほりして かすむ雲路を雁は行らん

遙尋花

吉野山またき尾上の花故に いくへの雲を袖に分けん

花始開

やかてはや心をうつすなかめ哉 かつ咲花の春の木末に

静見花

おさまれる春をうれしとみる人の 心もちらぬ花の下風

挿頭花

老らくのかさしに手折桜花 いとゝあたる色やそひなむ

花下忘帰

山桜いはてやしたふみる人の かへるさしらぬ花の下陰

雨後花

散にけりよの間の雨は春風に 今朝木の下の花の白雪

落花満庭

永基

ふみわけむかたこそなけれ庭の面に つもるも深き花の白ゆき

路苗代

隆富

賤のおかこのもかのもに道つけて 行きそしけき小田の苗代

松下躑躅

春ふかき木陰てりそふ玉松の みとりをそめて咲つゝし哉

池杜若

季保「二

むらさき色そへたてぬ杜若 おなし汀の松のふしなみ

歟冬露繁

道一

春雨はふるともなしに山吹の 八重にもをける花の露かな

社頭藤

季春

むかしにも猶たちこえて春日山 神のめくみにかゝる藤波

暮春鐘

親長

心してさのみなつけそ春もはや 日数すくなき入逢の鐘

惜三月尽

行春の名残をそへて聞侘ぬ

やよひ今のは

いりあひのかね

(以下空白)

(武井和人)

〔2〕内裏月次御詠 同年四月廿一日

〔神宮文庫蔵『嘉吉文安御會倭詠』(三・六三四)〕

同年四月廿一日

首夏

今朝よりはなへて涼しき衣手に 吹くる風も夏をしるらし

卯花

道一

山賤も心ありてやうへにけむ 垣ほつゝきにさける卯花

葵

若一

ゆふたすきかけていく世そ神まつる 卯月のけふにかさす葵は

郭公

季保

なれも今月をさそひて山の端に いつるもしるき時鳥かな

同

待よひの積る恨を慰めて 寝醒ことゝふ時鳥かな

橘

永基

ふりぬれは忍ふ習の袖に猶 花立はなの香をやしめまし」三

樗

隆富

しけりあふ木々の青葉に色かへて うす紫のあふち咲也

早苗

親長

男をき小田のしめ縄くるゝ日や とる手を急く早苗成らん

水鶏

道一

水鶏そと思ひなからも槇の戸を たゝくはたそと明てこそみれ

夏草

さこそけに心のまゝにしけるとも 道をは残せの辺の夏草

夏月

季春

うの花の光をそへて玉川の 里の名しるくすめる月かな

夕顔

若一

さきてこそ隔は見ゆれ夕かほの 花にてかこふ賤か中垣

蛩

永基

月夜にはそれとも見えぬ夕闇を おのか光と飛蛩哉

寄玉恋

はらはしよ袖の涙のしら玉か なにそとたにも人にとはれは

と糸と

道一

こぬくれは軒の忍ふにたさゝかにの いとくるしくも物思ふ哉

と衣と

季保

とにかくに思ひやつるゝ恋衣 今はうらみんたよりたになし

と帯と

隆富

思ふをはつゝむとすれとみえのおひの 見えてもむすふ契なれかし

と鏡と

いとゝ猶くもるつらさのます鏡 みぬ面影のうかふ涙に

と弓と

親長

たのめても人の契のしらま弓 心ひかするかひやかなか覧」四

と枕と

季春

うき人の手枕ならぬ枕さへ いつまでなれて夢もみせけん

と筵と

道一

いつまてかひとりまろねの小筵に とはぬ思ひを露も忍はむ

と鐘と

道一

いたつらに待夜はふけぬ今ははや 独ねよとの鐘のこえ哉

と舟と

しらせはやよそになるをの具つ舟 にほにも見えぬ心つくしを

暁

季保

鳥の音のさそはぬ夢もおのつから 老は寝醒の暁の空

松

永基

さかへ行君か八千代のためしとや 松に老せぬ色はみゆらん

竹

道一

あふきても君か恵をたのむそよ 竹の園生の千世の末まで

羈旅

隆富

たひ衣たちし日数もしられねは さそふるさとの遠さかるらん

述懐

すなをなるむかしの跡をふみゝても まよふ心のなと残らん

神祇

季春

もらさしな人の心しくもらすは 日よしの神のてらす誓よ

祝

親長

すゝす河八十瀬の浪もさらに今 ふるきに

かへる御代の

かしこさ

(二行分空白)「五

(武井和人)

③内裏月次御調 同年五月廿五日

〔神宮文庫蔵『嘉吉文安御會倭調』(三・六三四)〕

同年五月廿五日

夏朝

道一

袖ははやひとつにけふる今朝も猶 霞のころも立残りつゝ

夏雲

若千代丸

のこりけりはなこそ今は夏山も まかひし雲の簾計は

夏風

永基

夕霧や玉のみきりに吹落て 袖とへたてぬ風のすゝしき

夏露

季保

雨すぐる木ゝの木末はしけりても 雫や杜の下草の露

夏夕

隆富

むら雨は過行あとの山のはに のころ夕日の影そ冷しき

夏夜

道欽

うたゝねの夢もみしかく明にけり 橘にほふ夜半の枕に

夏山

見し春の面影たにも夏木立 しけりにけりなみよしのゝ山

夏野

親長

やきすてしあとも今は夏草の みとりそ深き春日のゝ原

夏滝

季春

冷しさはよそにたくひも夏引の 糸よりかけて落る滝波

夏海

若千世丸

こく船のとまひくあとも浪あらく はや夕立の志賀の浦かせ

夏川

五月雨のはれぬる教をふる川の みかさもたかき瀬ゝの白なみ

夏池

永基」六

風すきぬ庭の池水をのつから むすはぬ袖も冷しかりけり

夏江

道欽

難波江や塩ひもわかぬみをつくし 水かさそ増る五月雨の比

夏田

季保

おちこちの山田のさなへとり／＼に 賤かいとまはさそなかるらん

夏草

隆富

ことゝはん人もまたれぬふる郷は しけるもよしや庭の夏くさ

夏竹

ことし生の若枝あまたにしけりあひて 千世よ千代そふ窓の呉竹

夏篠

親長

秋よりもさらに冷しき夕露の しけき小笹に風かよひつゝ

夏松

季春

夏山やしけき木末を吹わけて 松にとかよふ風のをと哉

夏杉

道欽

夏としもおほえぬほとそ冷しきは 山下風のすきの村たち

夏橘

をのつから風のやとりとならの葉の しけみの陰そ分て冷しき

夏虫

若千世丸

夜もすから置そふ露の玉篠に 光をそへて飛蜚哉

夏獸

永基

ともしするは山の外にのかれきて 夏野に鹿やなかく臥らん

夏衣

隆富

吹風のめには見えぬと夏衣 うすき袂にしられぬるかな

夏船「七

夏ふかきにしまの風の打そよき 入江をめくるなこの浦舟

夏鐘

道欽

くるゝまの入あひなからみしか夜は 更行鐘の音つゝく也

夏恋

季春

数ならぬ賤かかやりの夕けふり くゆる思ひにむせふとをしれ

夏旅

親長

此ころは明ても残るみしか夜の 月にいそかぬ関の旅人

夏祝

すゝしさもなをまし水をむすひ

あけて

こゝに千とせを

松の下陰

(二行分空白)

(武井和人)

4内裏月次御調 同年六月十九日

〔神宮文庫蔵『嘉吉文安御會倭調』(三・六三四)〕

同年六月十九日

卯花似雪

うの花の光もたかしタくれの 笹は雪のやまとみる迄

郭公未遍

道一

深山にはなつなる物を時鳥 宮こになとか音を惜むらむ

月前時鳥

若一

つれなさにならひもそする有明の 月にはまたし山時鳥

名所早苗

隆富

けふはなを市に出たる人そなき あへの田の面の早苗取とて

盧橘薰風

季保

我袖に匂ふも風のたよりそと むかしわすれぬ水の立花

柚五月雨

永基

おのつからひかぬ宮木もなかれつゝ いつみの柚の五月雨の比」八

雲間夏月

さてもうしまちいつる程も夏のよの 雲間にふくる月の光ハ

野径夏草

季春

夏ふかき草葉を分る武蔵野も 末にや秋の花をみてまし

螢火照露

親長

しけりあふ草はのうれに置露を みかく光や螢なるらん

疎屋夕顔

道一

かりそめに賤かかきねを夕貞の 花こそ軒のかこひ也けり

遠山夕立

なかもやる外山にうつる日の影の　くもりもあへぬ夕立の空

樹陰納涼

若一

夕すゝみたちよる木ゝの下風は　秋とやいはん夏としもなし

晩夏蟬声

隆富

秋ちかき程をしれとや鳴蟬の　こゑのかきりをつくすたくれ

寄埋木恋

永基

くちはつる袖とも人にしられねは　身やいたつらの谷の埋木

と塩木と

いかゝせむはこふ塩木のこりすまに　憂数そへてかき思ひを

と宿木と

道一

うき人を松の木末にやとり木の　かはるけしきは色にみえつゝ

と杣木と

季保

うきしむみおの杣木のかひもなく　人はよそにや心ひくらん

と朽木と

季春

逢事を思ひもたえしつれもなき　松はくち木とならぬ物かは

と初草と

親長

春あさき雪間にめくむ初草の　はつかに見えし人を恋つゝ」九

と忍草と

若一

いくとせそ思ひしのふの草のなに　ふり行袖の露のみたれは

と思草と

若一

こゝろ置ちきりなりせは思ひ草　なひく葉末の露も憑まし

と下草と

隆富

しられしな波の下なるもしほ草　かくとも思ふ色しみせねは

と忘草と

道一

数ならて世に住の江の岸に生る　草の名をたに思ひ出すや

暁眠易覚

永基

夢たにもやすくもみえぬ枕には　老をなくさむ暁そなき

薄暮峯松

くれそむる嶺のすかたもほの／＼と　面影のこる松のむら立

山家人稀

季保

まれにたに問人もなき山郷に　たえすこそ聞軒の松風

風破旅夢

季春

松かねの枕の塵を払ふとも　夢をはのこせ床のやま風

海路眺望

親長

なかもやる波路の末もはる／＼と　なきたる興に出る舟人

寄道述懷

行末もすくなる跡を尋ねみは　まよひははてし敷鳴の道

竹契遐年

道一

九重に生そふ竹の若みとりいく

ちとせをか

きみは契らむ

(以下空白)一一〇

(石澤一志)

〔5〕内裏月次御詠 同年八月十五夜

〔神宮文庫蔵『嘉吉文安御會倭詠』（三・六三四）〕

同年八月十五夜

八月十五夜

道一

もろこしに今よひのなをはとめしより 吾国かけて澄る月哉

月前風

光そふよはの為とや半なる 秋かせはらふ雲の上の月

と雲

若一

はらふへき高根の雲はたちきえて くまなき月に嵐ふく也

と霧

季保

へたてつる峯の松はら霧はれて 木の間くらぬ月の影かな

山月

永基

八幡山秋のもなかの月影や 光をそへて代をてらすらん

岡と

隆富

行秋を月もやきそふ水茎の 岡の朝けに影のゝこれる

野月

宮城野や木の下露はしくれても 小萩かうれの月そさやけき

河と

道一

五十鈴川同しなかれのみくつとも もらさすてらせ瀬の月影

滝と

岩ねよりおつる音羽の滝つ瀬に 影もくたけてすめる月哉

橋と

季春

いとゝうきよるの契をいはゝしの あけわたるかとみつる月哉

浦と

若一

こゝろなきあまのたくもの煙さへ 月になひかぬ浦風そふく

禁中と

永基

万代の秋を契てすみのほる 御はしの月の影のさやけさ

水郷と一

うち川やいはこす浪に敷玉の かすさへみゆる瀬との月影

山家と

季保

軒近き松よりよそにいてそめて しはしみ山の秋のよの月

月前萩

道一

露むすひ月も移ふ糸萩の よるの錦もいろはみえけり

と薄

隆富

露になひき風にみたるゝ糸薄 いかてか月のかけをやとさむ

と女郎花

露なからにほふ華野の女郎花 名をむつまじみやとる月哉

と松

親長

軒近き松の木の間をもる程は 心つくしと月や成らん

と柞

季春

おしなへて月こそてらせうすくこく 霞は染しはゝそなれとも

月前雁

若一

おとつるゝたよりはうはの空ながら 月にまちみるかりの玉札

と鹿

いとゝうき太山の月の影ふけて あくかれ出る竿鹿のこゑ

と菰

季保

つきやとる草はの露に風過て こゑもみたるゝきり／＼す哉

と鏡

道一

月もよし渡にくもれ十寸鏡　むかへは老の影もはつかし

と衣

永基

聞侘ぬ身にしみまさる月の色も　ふくる夜寒の衣打音

と舟

漕出て行ゑもなみのよる／＼は　あまも月をやみをの浦舟

寄月恋

隆富「一二

待とせし人はつれなきよることに　月や渡の袖をとふらむ

と旅

季春

かすみつる都の空を出し夜の　月も秋をや白川の関

と神祇

親長

今夜なを神の心や住吉の　松風清くすめる月かけ

と尺教

道一

まよふ身は我心からくもりけり　すまはすむへき狩の月かけ

と祝

万代もみきりの月にみかく也　こと葉の玉も同じ光に

(以下空白)

(石澤一志)

〔6〕内裏月次御調　同稔八月廿七日

〔神宮文庫蔵『嘉吉文安御會倭調』(三・六三四)〕

同稔八月廿七日

新秋

吹あへす身にしむ風の朝ほらけ　心もやかて秋に成らし

七夕

道一

待遠にとしのわたりは思ひしに　逢瀬そはやき天の河波

萩風

若一

いつよりか身にしむ妻と成にけむ　萩の葉渡る秋の夕かせ

夕虫

永基

きり／＼す秋の哀をなをそへて　ゆふへにたえぬ音をや鳴らん

夜鹿

親長

くすかつら侘る妻なしと夜もすから　恨てそ啼棹鹿のこゑ

初雁

うす霧のはれ間にみゆる峯こえて　いそくもしるき初雁の声」一二三

秋田

季春

小山田にしはしなるこの音信て　稲葉の風の名残をそ聞

待月

季保

すみのほるほとそまたるゝ山の端の　空にほのめく月の光は

見と

道一

吾袖にやとりし影もへたゝれは　雲ぬのよそにみゆる月哉

惜と

山のはにしはしやすらへよはの月　したふ心を哀ともみは

朝霧

隆富

朝またき日影もみえぬ山のはゝ 夜の間の霧や猶のこるらん

擣衣

若一

消侘て衣うつらし賤のめか よさむかさぬる袖の露しも

葛風

永基

をしなへて心をしほる秋の色を 独うらむるくすの下風

笹菊

親長

咲にけりまかきの露も玉敷の 庭に色そふ白菊の花

紅葉

おのか色にあらぬ千しほの跡みせて 紅葉にふかき秋の露しも

初恋

季春

末^行もしらぬ恋路をふみ分て 忍ふの山に思ひ入かな

忍と

道一

よしさらは涙は袖にもらしてむ たれを思ふと色にみえすは

祈と

季保

いのりても心やひくと憂中に たのみをいとゝかくるしめ縄

契と

ゆくすゑもいさしら糸の打はへて なかき契をまつや憑む」一四

待と

隆富

とはれつるならひはしらぬうきみにも くるれは人のなとまたる覧

逢と

道一

むす^{まこ}ほれし人の心の下紐も とけてうれしき新枕かな

別と

若一

われもまたつれなきまでに有明の つきすもしたふ衣／＼の空

顕と

永基

くちぬれは袖をたよりにつゝみこし かひもなみたの色やみゆらん

積と

ひたすらにわすれぬ程の契そと 思ひなしても濡る袖かな

烈と

親長

今更にものは思はしかはり行 人をうらみのなき世也せは

浦松

季春

君か代のかすにやよまむ和哥の浦の なきさにしけき松の言の葉

窓竹

隆富

夜もすから窓の呉竹ふく風に 夢もむすはぬ閨のさひしさ

田家

守すてし山田の庵に風過て ひかぬなるこの音を聞かな

旅行

道一

野辺をわけ山をこえ行道すから 露もあらしもしほる袖かな

祝言

季保

わか君のめくみ数そふ行末を 思ふも久し万代の秋

(一行分空白)

依天下乱自九月無御月次

(以下空白)一五

(石澤一志)

〔7〕内裏月次御調 文安元年八月十五夜

〔神宮文庫蔵『嘉吉文安御會倭調』(三・六三四)〕

文安元年八月十五夜 去_レ年以_レ初_レ御月次

八月十五夜

／＼雲はれてこよひみちぬる月の名も はるかに高し秋の中空

月前風

道一

吹風のおさまれる代の秋そとや さらに雲井の月ものときし

と雲

若千代丸

こゝろして今夜なにおふ秋篠の 外山の月に雲もかゝらす

と霧

季保

うす霧も立はおよはて今夜猶 月の名高き秋の空哉

と露

永基

／＼置まさる露を尋は草葉より 我たもとにそ月はやとらむ

と霜

隆富

秋ふかき草葉の露は置かへて 霜にやこよひ月やとるらん

山月

郎寿丸

をはつせや尾上の嵐音ふけて 山のは遠くすめる月哉

嶺と

成任

／＼吹しほる嶺の嵐も音深く 松より出る月のさやけさ

谷と

／＼谷ふかみなかるゝ水も今みえて 山下きよき月の影哉

杜と

親長

もなかとはいか_はての杜のいはねとも 梢の月の色に見えつゝ

岡と 道一

ふかゝらぬ岡辺の松のむらゝに 木末晴たる月そさやけき

関と 季春

波の上も清見か関にすむ月や ふしのねつゝく雪とみゆらん

野と 阿庭丸 一六

露も猶光をそへて道のへの 草のはみかく秋のよの月

河と

身にそしむ川せのなみも音深く 流れにやとる夜はの月影

滝と

むは玉のよるとは誰かいはねより 月も落くる瀧の白いと

橋と 源政仲

片敷の袖にも月の霜置いて 夜寒の秋やうちの橋姫

池と 若千代丸

／＼すむ月の汀のまさゝ霜と見え 氷りとまかふ秋の池水

江と 道一

みしま江のあしまくれの玉かしは あらはにみえてすめる月哉

玉かしはにて候はゝ難波江とありたく候敷

それも藻にうつもるゝとのみ詠ならはし候かと存候

浦と 季保

みつしほに光さしそふ和哥の浦や いとゝたくひも浪の上の月

湖月

秋ふかみ月の氷とみつうみに やかてさえ行比良の山かせ

禁中と 永基

名に高き御階の月も今夜とて 猶影きよくすみのほりつゝ

古寺と

隆富

かつらきや豊浦の寺の明かたに かたふく月そ西に残れる

続古今源具氏朝臣哥にかつらきやとよらの寺の秋の月西にわ

たるまで影をこそみれかやうにて候歟心いくほともかはらぬ様に聞えたるかと存候

故郷と

道一

代々を経し里はふしみのあれまくも おしか啼野に月そすみける

水郷と

親長

さと人も今よひや分てみなせ川 流れも清くすめる月影

山家と一七

世を秋のあはれもふかき山郷に なくさむ程の月の影かな

田家と

成任

もりあかす山田のおものさひしさも 月のみそとふ秋のかりいほ

月前萩

郎寿丸

たくひなや露もみたれて糸はきの 花の錦にうつる月影

と 薄

若一

はらふなよの辺の尾花の露にこそ 月をもやとせ袖の秋かせ

と 女郎花

季春

女郎花露にややとしてなれも又 も中の月のなにやめてつる

と 松

道一

ことのはもふりぬる和哥の浦の松 色たにそへよ秋のよの月

と 槇

まきもくのひはらの木の間吹分て 月もくもらぬ山の秋かせ

月前杵

源政仲

はゝそちるいはたの小野の秋深て 夜さむの月もあらし吹也

と 雁

阿婦丸

影ふくる月も夜寒の秋かせに さそはれて鳴雁の一つら

と 鳴

永基

明方の月にあはれを猶かへて 野沢の鳴も今そ立なる

と 鶉

季保

露しけき床をうつらと秋さむみ 深行月の影に鳴らん

と 鹿

阿庭丸

よもすから月の光にさそはれて かれす妻とふ竿鹿のこゑ

と 猿

若一

嵐ふく同じみやまの木末をや 月によわたるましら鳴らん

と 蚕

隆富一八

枕とふ寢覚の床のきり／＼す 猶やよさむの月に鳴らむ

と 鏡

うかふ千里の秋の面影

おのつからかゝみとみかく月みれば うかふ千里の秋の面影

と 衣

郎寿丸

夜もすから月を友とや賤のめか うちもたゆまぬ鹿のさ衣

と 枕

成任

夜もすから枕さためすあくかれて 打ねぬ床の月をみる哉

と 蓆

道一

山ふかき木の下陰の苔むしろ 露は敷とも月はやとらす

と 舟

阿婦丸

須磨の浦やこき行舟のかすまでも しるき波間の月のさやけさ

寄月恋

阿庭丸

いまこんといひてもとはぬつれなさの うき有明の月をみるかな

寄月旅

親長

露すすふ草の枕はかはれとも 袖とふ月の影そよかれぬ

と懐旧

道一

老ぬれはみし世の月そしのはるゝ むかしはさのみ泪ならねは

と述懐

季春

／さかへつゝすめるみ空の月よりも たかくそあふく君か光を

と神祇

若一

くもりなき世を猶てらせいはし水 すむ月影も神の光も

と尺教

夜とゝもに心の水やすみぬらん うつるもきよき胸の月影

と祝

源政仲

あふくそよ君か光にたくへても 空行月の曇りなき世を」一九

僻案愚点九首

祐雅上

愚詠 三首

伏見殿 二首

宮御方 一首

兵部卿 一首

成任 一首

季春 一首

(五行分空白)

(日高愛子)

8内裏月次御詠

同年十月廿一日

(九歌)

〔神宮文庫蔵『嘉吉文安御會倭詠』(三・六三四)〕

同年十月廿一日 御月次

都初秋

雲まよふあさ気の風をさきたてゝ 都の空に秋やきぬらん

山早秋

若一

色みえてしのふの山の置露も 秋にそかへる今朝の初風

織女契久

道欽

いく秋もねかひのいとのうちはへて たゆる世そなき星の契は

聞萩

郎寿丸

身にそしむ秋の哀の一しほを そへて吹夜の萩の上風

女郎花多

永基

／たをるへき枝こそわかねをみなへし おほかる色に心移りて

行路萩

季保

露ふかみ分行袖にうつしても 猶あかすみる萩か花すり」二〇

薄随風

隆富

／一かたになひくとはなきいとすゝき 秋の野風や吹かわるらん

浅茅露

季春

風たにもとはすはいかて古郷の 庭の浅茅の露はらはまし

暁虫

阿婦丸

よひの間はたえす聞つる虫のねも やゝかすか成あかつきの空

雨夜虫

みたれそふあさちか露もふかき夜の 雨にしほるゝ虫のこゑ／＼

枕下蛭

源政仲

／きり／す鳴ねもさむし露霜の　ふるき枕のあか月の床

秋夕雲

親長

とはゝやなさひしき空のうき雲も　しくれぬかたの秋の夕を

水郷秋夕

道欽

里人は難波の秋のあはれとも　思ひわかすや夕暮の空

閑中秋夕

若一

山さどやこれも憂世の夕とて　猶袖ぬらす秋の白露

嶺鹿

成任

／松風のたよりにそ聞小倉山　嶺たちならすさほしかのころゑ

田家鹿

小山田やもるかりいほのかりにたに　打もねられぬ竿鹿のころゑ

鹿声何方

永基

ふきまよふ嵐のつてにたくひきて　いつくともなき棹鹿の声

初雁連雲

隆富

一つらは過行あとの雲路より　又をとつるゝ初雁のころゑ

薄暮雁

郎寿丸

くれ残る外山の峰の面影も　ほのかにみえて雁やきぬらん」二二

湖上雁

季保

／志賀の海や浪も雲との中空に　面影きゆる雁の一行

閑駒迎

道欽

／逢坂の閑の小川にひく駒の　水かふほとや影をとむらん

待月

季春

／よひ／に待ふくるまで成にけり　くれぬ空より出し月影

月出山

阿婦丸

山のはもきよきみ空の雲晴て　いつるそはやく秋のよの月

野月

若一

／いはしろや野中の月の影ながら　霜ふきむすふ松の秋風

月契秋

永基

万代の秋をちきれる月も猶　わきて二夜の名や残すらん

禁中月

なくてみしおも影なからすむ月に　あらぬ雲井の秋としもなし

閑屋月

源政仲

旅人も月に心やとまるらむ　すまの閑屋の秋の夜すから

池上と

隆富

／池の面にくもらぬ影をうつしては　水こそ月のかゝみ也けれ

海辺と

親長

浪のうへにかたふく影もおしてるや　なにはの月の明方の空

浜と

季保

雲霧は浪ちにきえて浦風の　月かけさむく吹上の浜

橋と

成任

／山風に雲はとたえてかつらきや　月そ夜わたるくめの岩橋

月前遠嶋

／浦遠み月の出しほの跡よりや　沖の小嶋もそれとみゆらん」二二

閑見月

郎寿丸

おのつから心そすめる秋の夜の　ふけゆく月をひとりなかくめて

老惜月

道欽

老か世もさそとおもへは哀也　つゐにかたふく有明のつき

惜心やいまちと不足二候へき

擣衣幽

季春

さそひえぬ遠ちの里の秋かせに
聞こそわかね衣うつこゑ
(六行分空白)

(日高愛子)

〔9〕内裏月次御詠 同年十月廿一日

〔神宮文庫蔵『嘉吉文安御會倭詠』(三・六三四)〕

文安元年十月廿一日御月次

初冬嵐

／＼紅葉を嵐の上にふきたてゝ 色なる空に冬やきぬらん

杜時雨

道一

ちりまかふ木のはの風は吹過て 残る時雨の松の下露

落葉埋路

若一

／＼ふみわくる木のはかうへに跡見えて 霜にそ残る山の下路

残菊

季保

をしなへてかれ行しもの下草に 猶秋のこす菊の一本

夕木枯

永基

ふりすぐる時雨もさむき夕暮に 音こそかはれ木からしの風

降霜

郎寿丸

をのつからさゆるあさけの露までも かさねてこほる宿の下草」二三

江寒芦

隆富

をく露の玉江の蘆は冬かれて 秋の色なる面影もなし

氷閉細流

／＼ゆきなやみいしまをつとふ山水も こほるははやき流也けり

寒月

阿婦丸

影うつす水もこほりてさゆるよの 月はいづくにやとりとふらん

浦千鳥

阿庭丸

夕しほのさすにまかせて友衡 浦つたひする声さはく也

残雁

道一

冬のきていかに翅のさむからん 霜をかさぬる衣かりかね

池水鳥

重賢

あさみより氷やすらん池水の 汀にとをきあしかものこゑ

屋上霰

親長

さゆるよの嵐もさやくさゝの屋の しのにみたれてちる霰哉

初雪

優賀丸

里まてはつもりもやらて遠山の 嶺に木たかき松のはつ雪

禁中雪

成任

名にたかきあまつ雲井の庭の雪 千世をかかねて君のみそみん

海辺松雪

浪かゝるいそ辺の松もあらはれて しつら^枝につもる雪そすくなき

狩場暮

季春

のかれこしかたのゝ鳥のおち草を 又踏分てかりくらしつゝ

遠炭竈

源政仲

をち方の里のしるへはすみかまの けふりにみゆる大はらの山

暁神楽

若一

さゝ波の声のみすみてあり明の 月はこほりに庭火たく也」二四

歳暮

道一

かくしつゝ今年もけふやす^あすか風 たゝいたつらに暮しはてぬる

思不言恋

永基

しらせはやおもふ心もいたつらに いはてくちぬる袖の気色を

忍涙と

季保

思ひあまる心の色のもれやせん 袖にはつゝむ涙なれとも

祈と

郎寿丸[?]

しみて猶人の心のしらゆふを かけてそ憑むかもの神垣

契久と

阿婦丸

いつまでそちきりてとはぬ年月の つもる斗の中のたのみは

待空と

隆富

今こそは又偽もしられけれ ねよとの鐘のつくるあかつき

初逢と

かきりあればこよひこえぬる逢坂に いつしか鳥のねをやいとはむ

別恋

阿庭丸

うつり香のこる斗の別ゆへ かたみもつらききぬ／＼の空

後朝[※]と

親長

※人偏ニ刀ノ如キ字形。ソノ左傍ニ朱書小字ニテ「七」。「切」ト訂正セシ歟。

面影はのこるうき身に立そひて なをきえかへるけさの別ち

逢不会と

季春

くる夜とはいつまで人をたのみけん 今は軒端のさゝかにのいと

返書と

道一

もしほ草かきなかしつることのはの かへる浪にそ袖は濡ける

顕と

重賢

うき名をはなにゆへもらすなみたそと かこつかたなき我思ひ草^哉

変と

成任

たのますはかわる心もかこたしと 思へはつらき我身也けり」二五

被厭と

いかにせむ月のあたりの雲ならて かゝる心のいとはるゝ身を

絶経年と

源政仲

たえねたゝ泪の露の玉のをに かゝる思ひのとしをふる身は

恨々 佳賀丸

しられしなつれなき中の恋衣 うらみにたえぬ我なみたとも

古寺鐘 若一

今も猶むかしなからの鐘の音は 残りて志賀の寺そふりぬる

嶺松 季保

かきりなきひゝきをかはせ雲の上に 万代遠き嶺の松かせ

里竹 郎寿丸

風わたる竹の林のゆふけふり なひきてとをし里の一むら

名所鶴 永基

数ならぬ我世ふけるの浦の鶴 なれもとしふる友と社みれ

故郷雨 隆富

すみあらず我ふるさとの軒の雨 忍ふをつたふをとの淋しさ

樵路日暮 道一

爪木とる山路くれぬと急きしに 帰る野里に日はのこりけり

山家煙 阿婦丸

山さとにたくもましはの薄煙 いかによそ火の淋しかる覧

山家鳥 親長

枝にすむ一のつるも友なれや うきみ山辺の松の下陰^陰

田家水 阿庭丸

／＼いほも猶のこる山田にすむ水の たえ／＼かよふ音そ淋しき

羈中送日 季春

かきりなくへたてそきつる旅衣 かさなる山にいつる日数も」二六

旅泊夢 成任

塩風も波の枕にふくる夜の うきねの床は夢そすくなき

海路 佳賀丸

はる／＼と波ちをさして行舟は いくつかの浦か泊り成らん

寄世述懷

／＼うきふしを聞につけても呉竹の 世をし治めぬみや恨みん

社頭柳 源政仲

柳葉のさかゆく色は見えてけり ゆふしてかくる神のいかきに

寄民祝 重賢

代をさらにおさまれとのみ民までも ひとつ心に君いのるらし

僻案愚点十二首

祐雅上

愚詠四首

伏見殿二首 阿庭丸一首 成任一首

宮御方二首 重賢朝臣一首 親長一首

(日高愛子)

10 内裏月次御詠 同年十一月廿一日

〔神宮文庫蔵『嘉吉文安御會倭詠』（三・六三四）〕

同年十一月廿一日

早春霞

道一

朝明に日のさしいつる山のはや 春くる方とまつかすむらん

朝寒嵐

／＼花とちる雪をさそひてきさらきや ころもて寒き朝風哉

若木梅

若一

／＼いまよりや千世をふる木のかさしまて わか木の梅の花に契らん

遠帰鳳

永基

このさとの春をハすてゝ行鳳も をちの高ねの花ハミるらん

夕春雨

阿婦丸

風ふかぬ御代もしられて春雨の 音長閑なる夕暮の空

花初開

季保

しはしこそまかひし雲も春風に 匂ふ木末の峯のはつ花

花満山

道一

嶺の松麓の木末おしこめて 雲かくれ行花さかりかな

才四句はゝかりありぬへく候敷雲になり行なとゝそ
かへかしと候て候

花如雪

郎善丸

桜ちる木のもととをくミわたせは さえぬあらしに雪そ乱るゝ

躑躅紅

成任

ときは山木ゝの下葉もくれなひに なへて移ふ岩つゝしかな

暮春月

隆富

行春の日数も今ハすくなきに 猶も余波や有明の月

朝更衣 親長

さゝ竹のおほミや人やけさの間に かふる一よの花染の袖

朝郭公 阿庭丸

人しれす待夜かさねて今ハゝや 心もつくる郭公哉

早苗多 重賢

けふもまたとりてひまなく思へとも 千町のさなへ猶残りつゝ

磯夏月

遠さかる浪間にみえて影もなを おしまか磯の夏のよの月

夕立過 佳賀丸

／＼夕立の空にとたえて行雲の あと吹おくる風の涼しさ

蛭知夜 季春

／＼みしか夜のほとやしるらん玉簾の 露に光をかはす蛭も

晩夏蟬 源政仲

啼蟬のは山に薄き日の影も はや秋ちかくくるゝ空哉

初秋露 若一

露のミや秋といはたのをのれさへ またほにいてぬしのゝ小薄

七夕別 道一 二八

思ひやる我たにかなし星逢の 別にむかふほとの名残を

しのゝめの空敷ほとのならいかにそや聞え候

草花早 永基

霜たにもまた置あへぬ秋の庭に まつ咲きそむる萩の一えた

深山鹿 季保

／＼山ふかきたちともさそな秋さむミ あはれしらるゝ棹鹿のこゑ

野徑虫 成任

／＼秋さむき野もせの草の白露を 分る袂に虫恨むらん

嶺月明 阿婦丸

嶺高ミくもゝおよはてすむ月の きよきみかさの山風ぞ吹

海辺月 郎善丸

／＼しらなみのよな／＼ことにあくかれて 舟さへいつる仲の月影
才二句つよく聞え候ことに今候ハすともと存候

橋上月

秋さむき溪の継はし白妙の 霜にや月のすみ渡るらん

遠擣衣 隆富

里遠き夜半の砧をさそひきて 嵐や音を近くなすらん

河紅葉 親長

大井川うつるもみちのかけなから 錦をわくる秋のいかたし

杜時雨 重賢

一とをりさそふあらしの時雨きて 残る木のはのもりの下露

池寒芦 道一

池水にかれふす蘆のミたれ葉を とつるこほりに風すさふ也

寒夜月 佳賀丸

夜あらしのふけ行軒の板間より もりくる月ハ猶やさゆらん

五文字にてハ俗にきこえ候歟連哥などには常に
用候歟と存候 二九

濱千鳥 源政仲

仲つ波たかしの濱の夕しほに たちみをさむミ千鳥啼也

野外雪

ふみわくる跡よりやかて道の辺に ミちそたとらぬ雪の明ほの

松雪積 阿庭丸

／＼ゆたかなる年もしられてふる雪の 光そ高き庭の玉松

夕炭竈 季春

すみかまの煙きえ行空になを くるゝ哀も大原のさと

寄風恋 若一

なひくとハ見えてつれなき契こそ 松ふく風のたくひ也けれ

と雨と 永基

まつ人を思ひもたえむ中／＼に ふりたにまされ夕暮の雨

と山と 阿婦丸

／＼いかにせむ身ハおく山のさねかつら くるよししらぬ人の契を

寄海恋 季保

しらせはやかけし心のおくの海に 身をしつつむへき思ひありとも

と草と 成任

忍ひあまる思ひの色を露の間に いかていはせの杜の下草

と木と 郎善丸

わすらるゝ身を秋山の松のは歟 (ママ) つみにかはらぬ色 (マコ) かひなし

と鳥と

今ハたゝ寝醒の友と成にけり いとひし比の鳥の八聲も

と虫と 隆富

いつよりかあまのかるもにすむ虫の われからかゝるもの思ふらん

暁更鶏 道一

もの思ふ老のね覚のなかきよハ あくる嬉しき鳥の声かな」三〇

古寺鐘 親長

雲ふかきおくハはつせの山寺に 鐘の音しつむ明ほのゝそら

遠村煙 重賢

一むらの遠き木末の姿ならて なひく煙ハ里かとそみる

同事にて候へとも松の梢と云よりはおとりて

田家水

きこえ候かと存候題の文字あまりにさしつめ候歟
佳賀丸

今もなを山田に水ハかよへとも かよふ人なき菴そふりぬる

名所浦

阿庭丸

久にへん年もつものりの浦かせの よはにや君か萬代のこゑ

羈中雲

とをさかる朝の山も白雲の あとにかさぬるたひの日かすに

独述懷

源政仲

いかにせんうきをかたらふ友たにも 涙の外に人しれぬ身を

寄鶴祝

季春

／つきせしな千とせに世もかきらぬ歟あまるよハひとは 今しら鶴の君に契て

僻点十首

愚詠一首

宮御方一首

四辻前中納言一首

郎善丸一首

阿庭丸一首

阿婦丸一首

佳賀丸一首（マツ）成任一首 季春

二首

（一行分空白）

（山本啓介）

11 内裏月次御詠 同年十一月廿四日当座

〔神宮文庫蔵『嘉吉文安御會倭詠』(三・六三四)〕

同年十二月十四日 當座

山路落葉

山かせの跡のみ見えてかよひちハ さなからうつむ木々の紅葉ゝ

籬殘菊

佳賀丸

をのつから草の笹に置霜の 下葉にのこる秋のしらきく

枯野朝霜

源政仲

ミし秋の面影もなく冬かれぬ 朝をく霜のまのゝかや原」三一

井邊氷

親長

くむ人も影やたえなむ山の井の 朝風さむミこほりかさねて

深夜冬月

郎善丸

置まよふ小篠の霜もふかき夜に 猶さへまさる月の影かな

濱千鳥

阿庭丸

風さゆる袖のミなどに夜もすから 友よふ千鳥声さハく也

篠上霰

成任

ちりまかふをともしたれて小篠原 あられそさやくの辺の夕風

庭雪獸人

宮菊丸

とふよりもとハぬは人のなさけかな ふりミふらすみ薄雪の庭

海邊松雪

しほ風のあら磯浪の玉松に つもりもやらぬ雪そミたるゝ

竹雪深

阿婦丸

今朝ハはやまかきの竹も埋れて 夜の間にふかし庭の白雪

鷹狩日暮

親長

くれぬともかた野ゝましはしはし猶 同しあとをや分もつくさん

遠炭竈

立のほるけふりの色もたえゝに くれ行山のおくの炭かま

惜歳暮

季春

をしむそよたゝいたつらに行年ハ 我身ひとつにつもるならねと

淺始恋

しのひあまりけふうちいつることのはに ふかき思ひの色ハ見えすや

祈經年と

うけひかぬ契もつらし神垣に かけししめのくちはつる迄

連夜待と

郎善丸

我もまたおもへはつらしこぬ人を いく夜かひなく待あかしけむ」三二

逢夢と

阿庭丸

さむるおややかて別と思はまし 夢にあひみる夜半の契ハ

曉別と

宮菊丸

つらきかなおきわかれにしうき人の 面影のこるあか月の空

歎名と

いかにせんうき名とり川行水の かへらぬ瀬ゝにぬるゝ袂を

逢不會と

親長

あふことを思ひたえてもまつらかた もろこし舟のこきや帰ると

返書と

季春

うらむそよ人の心の秋風にか へるまくすの露の玉章

依涙頭と

同

いかにせん袖の泪の玉ゆらに つゝミもあへすもるゝうき名を

恨絶と

源政仲

たえはてぬ契りなりせはうき中に 今一度はうらミてそミン

嶺上松

阿婦丸

嶺高き松の木末に見えてけり 大内山の千代の行末

故郷雨

宮菊丸

数ならぬ身をしる雨や故郷の 軒の玉水をと増るまで

名所浦

成任

行末の千代のかきりもしら波の かけて色そふ和哥の浦松

山家夕嵐

親長

あらしのミ松の戸たゞく山里の 夕にまさるあはれやハある

風破旅夢

源政仲

ふる郷にかへりし夢も又さめて おなしかりねの風の音かな

寄木述懷

ことの葉の花咲ぬ身や埋木の 名にあらはれぬたくひ成らん」三三

と神祝

季春

君かためあさ夕いのるもろ神も

同じ心に

代を

まもるらし

(以下空白)

(半面空白)」三四

元禄六癸酉上巳

描之畢

(山本啓介)

【略解題】

①底本について

底本とした神宮文庫蔵『嘉吉文安御會倭譚』（三・六三四）に関しては、早く井上宗雄『中世歌壇史の研究 室町前期』（風間書房、一九六一・一二）に、以下の如き論及を見る。

永享十一―二年の月次歌のあとを承けるのが嘉吉三々文安元年会詠の嘉吉文安御會倭譚で（嘉吉一、二年欠）……嘉吉文安御會倭譚（一冊）は嘉吉三年の三月尽・四月廿一日・五月廿五日・六月十九日・八月十五夜・同廿七日（天下騒乱により以後中絶）、文安元年八月十五夜・十月廿一日（両度あり、一は九月か）・十一月廿一日・十二月十四日。これは、後花園天皇と伏見宮及びそれらの側近を作者とした内々の歌会であつて、道欽・若千代丸（貞常）・永基・隆富・季保・親長・季春、文安元年には成任・政仲・重賢・阿庭丸その他が加わり、祐雅（雅世）が合点することあつた。卅首又は五十首歌会である。（前掲書・一四二頁）

底本の書誌は以下の通り。

「装訂」袋綴装。「数量」一冊。「法量」縦二六・〇横一九・〇cm。「表紙」原装、白無地の鳥の子。「外題」嘉吉文安御會倭譚（題簽「白無地、一六・四×三・六cm、前表紙中央、原装、識語ト同筆ナラム」）。「内題」内裏月次御譚嘉吉三年三月盡（端作題）。「本文」一面一三行、和歌一首一行書。「紙数」首部遊紙一丁、墨付三五丁。内訳ハ以下ノ如シ（見出シハ端作題）。

内裏月次御譚 嘉吉三年三月盡

一才〓三才

同年四月廿一日 三ウ〓五ウ

同年五月廿五日 六才〓八才

同年六月十九日 八ウ〓一〇ウ

同年八月十五日 一才〓一三才

同稔八月廿七日 一三ウ〓一五ウ

文安元年八月十五夜御月次以初 一六才〓二〇才

同年十月廿一日九歌 御月次 二〇ウ〓二三才

同年十月廿一日 御月次 二三ウ〓二七才

同年十一月廿一日 二七ウ〓三一ウ

同年十一月廿四日 当座 三一ウ〓三四才

識語 三五才（後表紙見返し）

「本文料紙」楮紙。「識語」（六九三）元禄六癸酉上巳／描之畢（後表紙見返し右寄セ、本文ト別筆〔外題ト同筆敷〕）。「描」ナル言辭、奥書・識語ニオイテハ稀用例也。臨摹・模写ナドノ意敷。「蔵書印」「林崎／文庫」（方朱印、単郭、墨付第一丁表右上）、「林崎文庫」（長方朱印、双郭、墨付第一丁表右下）、「天明四年甲辰八月吉旦奉納／皇太神宮林崎文庫以期不朽／京都勤思堂村井古巖敬義拜」（長方朱印、単郭、後表紙見返し左下）。「書写者、書写年代」元禄六年。「備考」本文ニ朱細筆ニテ多数書入存セリ。但シ、以下ノ五箇所ノミ墨細筆ニヨル。

③「夏旅」題歌・「い」「い」存疑

⑦「関々（月）」題歌・「ならぬ敷」

⑧「薄随風」題歌・「花敷」

⑧「雨夜虫」題歌・「さそなけに敷」

〔8〕「橘と（月）」題歌・「も敷」

墨筆・朱筆トモ、本文ト同筆ト思ハル。類本ハ存セズ。マタ、個々ノ歌会モ他本ノ存在ヲ知ラズ。

〔2〕歌会の位置づけについて

井上は前掲書にて「後花園天皇と伏見宮及びそれらの側近を作者とした内々の歌会」と位置づけてゐた。このことを証すると思はれるのが、以下の記事である。

……予（＝甘露寺親長）不聞、勅答、入風呂了、爰暫有召参内、以民部卿忠富^{（白）}仰云、旧院御代内と御会之時、小児等献懷紙、被重公卿

之上云と、被経御沙汰歟如何、……富就朝臣其時為童形、内と祗候、佳

賀丸為位階上首、……『親長卿記』（史料纂集による、以下同様）

文明五年七月二七日条）

むろん、この記事が、小論で釈文を示した、嘉吉・文安期のこの歌会を指すと直ちには断定出来ない。しかし、「小児等献懷紙」「佳賀丸」等、符合する所もあり、ここでは、上述の如く判断しておくこととしたい。

なほ、〔6〕内裏月次御謠 同稔八月廿七日〕末尾に記載される「依天下乱自九月無御月次」の「天下乱」は、「禁闕の変」を指す。

（武井和人）